

T2・②層に対応する②層下にあるから、近現代を下限とする。ただし、先述したようにT2・⑨層に対応する堆積が何らかのかたちで失われているとみるなら、T2・⑩層に対応する可能性のある③層上にある第1遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期に遡るとも考えらる。第2遺構面(第15図・表4)

トレンチ西壁に沿って設定したサブトレンチの⑨層上面に小規模なピットを確認した。部分的な検出で、全体像は判然としないが、ローム層とみられる⑨層上に形成されている。T2・⑩層に対応する可能性のある③層に覆われており、遺構面の時期はV期を下限とするが、⑨層上に遺構面があることから、縄文時代に遡る可能性もある。

6. 出土遺物について

(1) 土器

縄文時代の土器

T1・④層、T2・⑩層、T2・⑫層、T2排土中、T3・②層、T3・③層、T3・④層から縄文土器が出土した。小片で時期の特定の難しいものもあるが、その多くは縄文時代後期中葉の土器片である。

図4-3はT1・⑥層から出土した。精製土器の口縁部片で、鉢ではないかと思われる。肥厚する口縁部には1条の凹線状の沈線が施されており、突帯状を呈す。また、口縁上端部には軽く押さえた浅い刻目がある。外面は丁寧に磨かれている。内面は粗い削り調整である。小片のため、どの型式に属するものか不明である。

図4-4はT1・④層から出土した。崎ヶ鼻式土器の頸部から胴部にかけての破片と思われる。2条1組と推定される横・斜め方向の沈線文が施されている破片下半を胴部、やや外反し無文の破片上半が頸部にあたると考えた。摩滅しているが、内外面ともナデ調整であろう。

図9-21はT2・⑩層から出土した。崎ヶ鼻式の口縁部片である。逆く字状に屈曲する口縁には、円形の刺突文があり、それを挟むように2重の円弧文が沈線で表現され、横方向の平行沈線文と組み合う。内面は丁寧なナデ調整である。

図9-22もT2・⑩層から出土した。無文の口縁部片で、外面には磨きが施されている。緩やかにくびれる精製の鉢であろう。内面は丁寧なナデ調整である。

図9-23はT2・⑫層から出土した。崎ヶ鼻式の口縁部片である。21と同一個体の可能性もある。逆く字状に屈曲する口縁に横方向の平行沈線文が2条施されている。口縁はほぼ水平に見えるが、緩やかに波状を呈すかもしれない。内面はナデ調整である。

図9-24はT2・廃土中から採集したものである。内面に粗い条痕調整が施されており、矢印で示した点に屈曲が認められることから、胴部上半の破片ではないかと考えた。外面には太い粘土紐で渦巻状の浮文が貼り付けられている。中津式や福田KⅡ式(鳥式)にみられるような双耳壺の肩部片ではないかと推定する。

図12-10はT3・②層から出土した。崎ヶ鼻式の口縁部片である。肥厚し、波状を呈す口縁部には沈線文が描かれており、波頂部に退化した渦巻文、その周囲に矢羽根状の文様と、窓枠状の区画文が表現されている。窓枠状の区画内には縄文(RL)が施されている。また、器面は摩滅しているが、内外面ともナデ調整が施されている。

図12-16はT3・③層から出土した。崎ヶ鼻式の肩部片である。頸部外面は無文で、ナデ調整が施されている。胴部外面には縄文(RL)が施されている。内面はナデ調整、矢印の所に屈曲があり、それ以下には調整単位が明瞭に残る粗雑なナデが施されているかもしれない。

図12-17もT3・③層から出土した。崎ヶ鼻式の胴部片である。頸部外面は無文で、ナデ調整が施されている。胴部外面には縄文(RL)が施されている。内面はナデ調整、矢印の所に屈曲があり、それ以下のナデは調整単位が明瞭に残る粗雑なものである。

図12-26はT3・④層から出土した。崎ヶ鼻式の口縁部片と思われる。口縁部下方に2条の平行沈線があり、その上方にやや弧状の沈線が縦方向に施されている。内面及び外面頸部は丁寧なナデ調整である。

図12-27もT3・④層から出土した。崎ヶ鼻式の口縁部片である。緩やかな波状を呈しており、一条の平行沈線により上下が2分され、その上段には縄文(RL)が施されている。内面は丁寧なナデ調整である。

弥生時代～古墳時代前期の土器

T1・②層(図4-1)、T2・第1遺構面溝状遺構埋土中(図7-1)、T2・⑨層(図8)、T2・⑩層(図9-1~20)、T3・②層(図12-1~9)、T3・③層

(図12-13~15)、T3・③層(第12図18~25)から弥生時代後期~古墳時代前期の土器が出土した。

T1・②層 図4-1はV-1期に一般的な甕の口縁部片である。口縁上端部が短く拡張、やや内傾気味に直立する口縁帯を形成している。口縁帯には2条の凹線文が施されている。口縁下端部は若干下垂する。内外面ともにナデ調整、外面に煤が付着している。

図7-1はV期の高坏脚部である。脚台部は複合口縁状を呈し、上端部が上方に拡張する。脚部は粘土が充填されている。内外面ともにナデ調整である。

T2・⑨層 図8-1はV-3期~VI-1期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾、外反する口縁帯には細い多条平行沈線文が施されているが、大部分がナデによって消されている。口縁下端部は斜め下方向に短く拡張している。内外面ともにナデ調整、外面頸部に煤が付着している。

図8-2はVI-1期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が上方に拡張、外傾、外反する口縁帯にはナデ調整が施されている。ナデ消し前に多条平行沈線が施されている可能性もある。外面頸部、内面口縁部はナデ調整、口縁下端部に煤が付着している。

図8-3は古墳時代前期にみられる複合口縁の壺である。口縁上端部が拡張、やや内傾気味に直立する口縁帯にはナデ調整が施されている。口縁下端部は横方向に短く拡張する。外面頸部、内面はいずれもナデ調整、口縁部の内面下半には口縁部の屈曲に沿って強いナデ調整が施されている。

図8-4はVI-1期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾する口縁帯には波状文が施されている。口縁下端部は斜め下方向に若干拡張するが、形骸化している。外面頸部はナデ調整、肩部には波状文が施されている。内面口縁部~頸部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。

図8-5はV-3期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、やや内傾気味に直立する口縁帯には二枚貝腹縁部によるとみられる4条の多条平行沈線文が施されている。内外面ともにナデ調整である。

図8-6はV-1~2期にみられる壺である。口縁上端部が拡張、直立する口縁帯に3条の平行沈線文が施されている。口縁下端部は短く下垂する。内外面ともにナデ

調整である。

図8-7はV-1~2期に一般的な甕である。口縁上端部が拡張、やや内傾する口縁帯に3条の平行沈線文が施されている。口縁下端部は短く下垂する。内外面ともナデ調整である。

図8-8もV-1~2期に一般的な甕である。口縁上端部が拡張、やや内傾する口縁帯には6条の平行沈線文が施されている。口縁下端部は短く下垂する。外面の調整は頸部~胴部にナデ、頸部には縦方向の刷毛目の痕が残る。内面の調整は口縁部がナデ、頸部が横方向の刷毛目後、ナデ、頸部以下は刷毛目と削りが施されている。

図8-9はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が拡張し、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。外面頸部の調整は摩滅しており不明、内面口縁部はナデ調整である。

図8-10は素口縁の甕である。やや内湾気味の口縁部が外に開く。口縁部は内外面ともナデ調整、内面に一部刷毛目状の調整痕が認められる。外面には煤が付着している。内面頸部以下は削り調整である。同様の形態の甕がV期以降、古墳時代中期まで存在すると思われるが、口縁部の開き具合、頸部に施されている削りといった特徴から、V期後半のものとして推測する。

図8-11はV期後半の素口縁の鉢であろう。短い口縁部がくノ字状に外屈する。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。

図8-13はVI期~古墳時代前期の甕の胴部である。肩部にあたり、上半は縦方向の刷毛目後、櫛歯状工具による波状文が施されている。一方、下半は整然とした横方向の刷毛目が施されている。内面は削り調整である。

図8-14は底部で、外面調整は削り後、ナデ、内面の調整は不明である。底面は粗雑な削りが施された後、ナデ調整が行われている。

図8-12は横位置につく把手である。接合痕で剥離している。

T2・⑩層 図9-1はV-3期に一般的な複合口縁の壺である。口縁上端部が拡張、外傾、外反する。摩滅が著しく、内外面の文様、調整等は不明である。口縁下端部に若干斜め下方向に拡張するが、形骸化している。

図9-2はV-3期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾し、口縁帯を形成している。口

縁帯には櫛歯状工具による多条平行沈線文が施され、下半の一部はナデ消されている。口縁下端部は形骸化しているが、僅かに下垂している。外面頸部はナデ調整、頸部直下には左斜め下に傾く連続刺突が施されているようである。内面の調整は口縁部がナデ、頸部以下は削りである。

図9-3は壺の肩部である。頸部に6条、肩部に5条の多条平行沈線文、多条平行沈線文間に波状文が櫛歯状工具によって施されている。内面の調整は、頸部が粗いナデ調整、頸部以下は削りである。施文の特徴からV-3期～VI-1期頃のものではなかろうか。

図9-4はV-3期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾、外反する口縁帯に二枚貝腹縁部による10条の多条平行沈線文が施されている。口縁下端部は斜め下方向に拡張する。内外面ともナデ調整である。

図9-5はV-2～3期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、直立する口縁帯に櫛歯状工具による8条以上の多条平行沈線文が施されている。なお、口縁帯上半部にはナデ消しが行われている。外面頸部はナデ調整、縦方向に施された刷毛目の痕跡が強く残る。内面口縁部は削り後、ナデ、頸部以下は削りが施されている。

図9-6はV-3期に一般的な複合口縁の壺である。口縁上端部が拡張、直立、外反する口縁帯に櫛歯状工具による7条の多条平行沈線文が施されている。口縁下端部は僅かに下垂する。外面頸部および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。

図9-7はV-2期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、内傾する口縁帯に櫛歯状工具による6条の多条平行沈線文が施されている。口縁下端部は僅かに下垂するが形骸化している。外面頸部および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。内面口縁部の一部には刷毛目の痕跡が残る。

図9-8はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張し、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。摩滅しており、内外面の調整は不明である。

図9-9はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯

には3条の凹線文が施されている。外面頸部の調整はナデ、内面の調整は不明である。外面口縁部～頸部には煤が付着している。

図9-10はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。外面頸部はナデ調整、胴部上半は縦方向の刷毛目調整、内面口縁部～頸部直下まではナデ調整、以下は削り調整である。外面には煤が付着している。

図9-11はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。内面口縁部には一部に削りと刷毛目の痕跡が残る。外面口縁下端部に沿って煤が付着している。

図9-12はV-1期に一般的な甕である。口縁上端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には不明瞭な凹線が2条程度施されている。外面の調整は頸部にナデ、胴部上半に刷毛目が施されている。内面の調整は口縁部から頸部直下にかけてナデ、以下は削りである。外面口縁部には煤が付着している。

図9-13はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、外反する口縁帯を形成している。口縁帯はナデが施されており無文である。外面および内面口縁部～頸部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整と思われる。口縁部の内外面には煤が付着している。

図9-14はV-1期に一般的な甕である、口縁上端部が短く拡張、外反する口縁帯を形成している。口縁帯はナデが施されており無文である。外面頸部～胴部、内面口縁部はナデ、内面頸部以下は削りと思われる。

図9-15もV-1期に一般的な甕である。小型の甕で外面には赤色顔料が塗布されている。内面口縁部にも顔料が塗布されていた可能性がある。口縁上下端部は極短く拡張しており、丸みのある無文の口縁帯を形成している。外面頸部はナデ調整、胴部上半は刷毛目、内面口縁部から頸部にかけてナデ調整、内面頸部以下は削りである。

図9-16は甕の底部である。外面は丁寧なナデ調整、内面は削り後、ナデ調整が施されている。外面には一面に煤が付着している。

図9-17は壺である。口縁上端に幅広い口縁帯が形成され、3~4条の櫛歯状工具によるとみられる多条平行沈線が施されている。外面頸部は丁寧なナデ調整、外面胴部上半は刷毛目、内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りまたはナデ調整である。頸部には焼成前に穿孔が施され、口縁帯および外面には赤色顔料が塗布されている。同形の壺はV期を通じて認められるが、口縁帯が形骸化していないことからV-1期のものと考えられる。

図9-18はV-1期にみられる高坏の坏部である。口縁上下端部が拡張、内傾し、やや外反する無文の口縁帯を形成している。内外面ともにナデ調整である。

図9-19はV期の高坏で、坏部~脚部の一部である。外面は丁寧なナデ調整、坏部内面は粗いナデ調整、脚部内面は削りである。外面には赤色顔料が塗布されている。

図9-20はV期の高坏脚部である。粘土が二重に重ねられており、重厚な脚部を作っている。外面の調整はナデ、内面上半は比較的丁寧なナデ、下半は削りである。

T3・②層 図12-1はV-3期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾、外反する口縁帯に二枚貝腹縁部によるとみられる8条前後の多条平行沈線文が施されている。また、肩部には二枚貝腹縁部による左下がりの連続刺突が施されている。外面頸部、内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。

図12-2はV-2期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端が上方に拡張、直立する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の平行沈線文が施されている。口縁下端の拡張は形骸化している。内外面ともにナデ調整である。

図12-3はV-1期に一般的な壺である。口縁上下端部が短く拡張、内傾し口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。内外面ともにナデ調整である。

図12-4もV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成している。口縁帯には3条の凹線文が施されている。内外面ともにナデ調整である。

図12-5はV期の壺であろう。頸部は長く直立し、口縁部付近で外反する。内外面ともにナデ調整、外面には縦方向に施された刷毛目の痕跡が残る。頸部屈曲部直上に矢羽根状に施された刺突が巡る。刺突内に板目に似た条痕がみられることから、刷毛目と同一工具による刺突

が考えられる。

図12-6~9は底部片である。6~8は平底で、8の底面には櫛歯状工具による施文が施されている。6の外面はナデ調整、内面は削り後、ナデ調整、7の外面はナデ調整、内面は削り後、粗いナデ調整、7は不明である。9は緩い丸底で、底面には渦巻き状の削り痕が明瞭に残る。

T3・③層 図12-13はV-2期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾する口縁帯に3条の平行沈線文が施されている。口縁下端は若干斜め下方向に拡張する。肩部にはヘラ状工具による左下がりの連続刺突が施されている。外面は摩滅が著しいが、内面はナデ調整である。

図12-14はV-2期に一般的な複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、外傾する口縁帯に櫛歯状工具による多条平行沈線文が施されている。外面頸部、内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。

図12-15はV-2期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が上方に拡張、直立する口縁帯に2条の平行沈線文が施されている。口縁下端部の拡張は粘土の貼付によって表現されていたようだが、剥離している。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。

T3・④層 図12-18はV-1期に一般的な甕である。口縁上下端部が短く拡張、内傾する口縁帯を形成しており、3条の凹線文が施されている。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削り調整である。外面には煤が付着している。

図12-19はV-2期にみられる複合口縁の甕である。口縁上下端部が上下に拡張、直立する口縁帯には4条の平行沈線文が施されている。内外面ともナデ調整、内面頸部に一部、横方向の刷毛目痕が残る。外面口縁部には煤が付着している。

図12-20はV-2期にみられる複合口縁の甕である。口縁上端部が拡張、直立する口縁帯に1・2条の平行沈線文が施されている。口縁下端部の突出は粘土帯の貼付によって表現されていたようだが、剥落している。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。外面には煤が付着している。

図12-21はV期の高坏の口縁部ではないかと思われる。

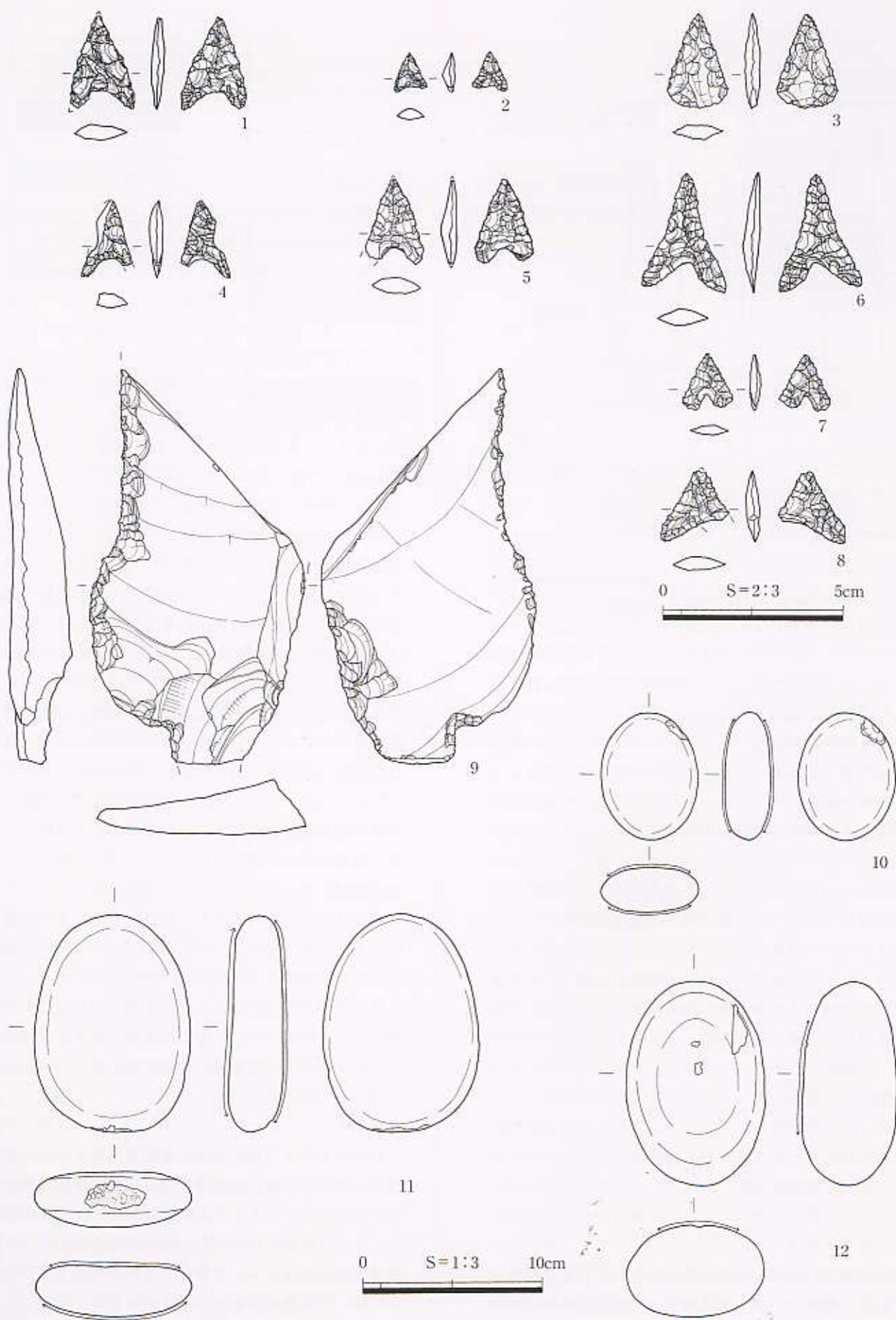


图15 出土石器实测图

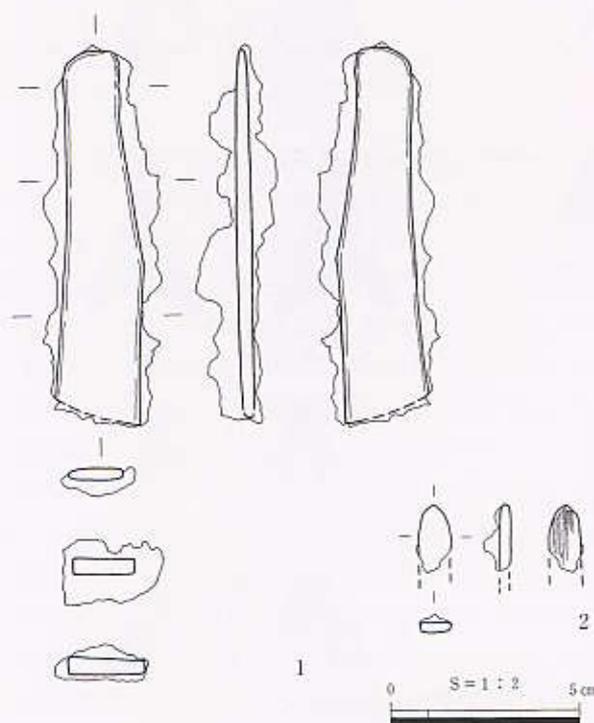


図16 出土鉄製品実測図

口縁部は短く上方に立ち上がり、短い無文の口縁帯を形成している。外面および内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。

図12-22は壺の頸部～肩部の破片と思われるが、頸部の一部に煤が付着している。頸部には櫛歯状工具によるとみられる多条平行沈線文が施されている。外面および内面頸部はナデ調整、内面頸部以下は削りである。内面調整の特徴からV期のものと考えられる。

図12-23はV期の壺の口縁部である。外傾する外反気味の口縁部には2条の不明瞭な凹線文が施されている。内外面ともナデ調整である。

図12-24・25は底部である。いずれも平底で、外面には縦方向の刷毛目痕が残り、内面は削り後に粗いナデ調整が施されている。25は底面にも刷毛目痕が認められる。

(2) 土製品

土錘3点と不明土製品1点が出土した。

土錘はT1・②層から図4-2、T2・溝状遺構内埋土から図7-2、T3・②層から図12-12が出土している。いずれも同型の土錘である。胎土は精製されており、弥生土器とは異なっている。どちらかという、中近世土器の胎土に似る。

不明土製品はT3・②層から出土した。胎土は精製されており、緻密で、堅く焼き締まっている。時期は不明である。

(3) 石器

石鏃8点(図15-1~8)、スクレイパー1点(図15-9)、礫石器3点(図15-10~12)が出土した。

石鏃はT1・②層から1点、T2・④層から1点、T2・⑦から2点、T2・⑩層から3点、T3・①層から1点、T3・②層から2点、T3・③層から1点が出土した。石材は黒曜石製のものが7点、安山岩製のものが1点である(表8)。黒曜石製の7点は全て凹基式で、形態にはバリエーションがある。図15-1・5・7の基部には丸く小さな抉りが入っており、返しも比較的丸い。図15-1・5と7の形態差は大小の違いであろう。図15-2は抉りの浅い小型品である。後は摩耗しており不明確である。4は抉りが深く、返しも先鋭である。図15-6・9は抉りが深く、返しが左右に張り出している。図15-3は安山岩製で、唯一基部が丸い。表裏面の基部付近に素材剥片の剥離面を残している。

スクレイパー(図15-9)はT2・⑩層から出土した。黒曜石製で、上半を大きく欠損している。一個縁に鋭い刃部を設けている。左測縁部の基部付近には表裏面から抉りを施しており、打製石包丁の可能性も考えられる。

礫石器3点は全て磨石である(図15-10~12)。T3・②層から2点、T3・③層から出土した。図15-10・11は表裏面が顕著に摩耗しており、10の下端部には敲打痕も確認できる。図15-12は表面が若干摩耗している。

(4) 鉄器

鉄器は2点出土している。図16-1はT2・⑩層から出土した板状の鉄製品である。鉄斧の可能性もあるが、刃部は研ぎ出されていない。図16-2はT3・梯子状遺構埋土中から出土したヘラ状の鉄製品である。先端部は鈍のような形状をしているが、刃部は研ぎ出されていない。また、裏面には木質が付着している。

7. まとめ

これまで妻木山地区では丘陵尾根筋を中心とした発掘調査が行われ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が尾根の起伏に対応するように累積する状況が確認されている。また、同時併存可能な竪穴住居跡の抽出作業によって、一時期、数棟の竪穴住居によって構成される居住の単位が複数存在していたことが明らかになっている³⁾。

一方、こうした居住域近辺にある谷筋の状況について

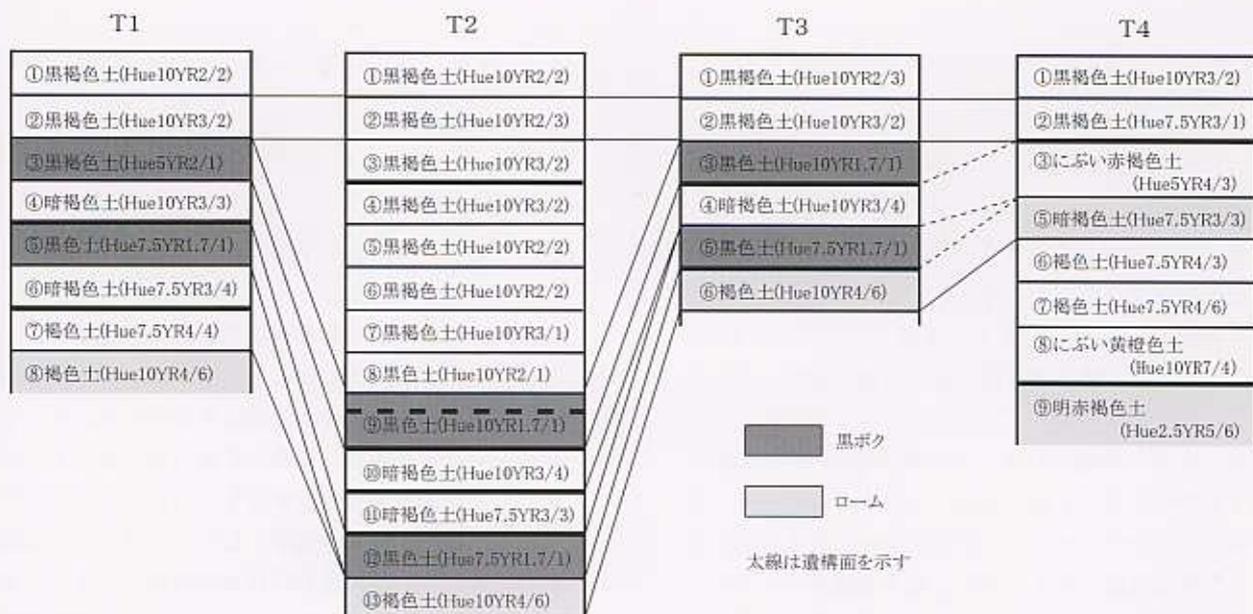


図17 各トレンチの堆積対応関係模式図

は不明な点が多い。そこで、第1期内容確認調査では、居住域周辺の様子を把握するために、妻木山地区の谷部を対象とした調査を実施することにした。その結果、平成14年度に実施した、妻木山地区1区と3・4・5・6区を隔てる谷筋を調査対象とする第9次発掘調査では、一部のトレンチで弥生時代後期～古墳時代前期のピット群を確認した³⁾。断片的な調査にとどまるため、調査地点の具体像には言及できないが、こうした調査成果の蓄積が居住域周縁部の様子を明らかにするうえで重要な位置を占めていることはいままでの間もない。

さて、第10次発掘調査では妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ鞍部に4カ所のトレンチを設定した。以下、各トレンチで検出した遺構面の対応をはかりながら、調査成果のまとめとする。

1) 縄文時代

T1、T2、T3で縄文時代に遡る遺構面を確認した。T1・第2遺構面、T3・第2遺構面はそれぞれT2・⑫層に対応するクロボク層に覆われている。T2・⑫層からは縄文時代後期中葉の崎ヶ鼻式土器が出土しており、T1・第2遺構面、T3・第2遺構の所属時期を示唆するものと思われる。

なお、今回の調査で出土した縄文土器の大多数は崎ヶ鼻式土器の範疇で捉えられるものであるが、一部に中津式～福田KⅡ式(烏式)に遡りうるものもあるので、後期前半から後期中葉にかけて断続的な土地利用が行われていた可能性もあろう。

なお、妻木丘陵の北側を流れる妻木川周辺には縄文時代遺跡が点在している。その一角を占める妻木法大神遺

跡からは崎ヶ鼻式土器を主体とする後期前葉～中葉の土器が出土しており、その近辺に縄文時代後期の集落の存在がうかがわれる。第10次発掘調査地は妻木法大神遺跡から1km圏内にあり、調査地周辺が丘陵下の集落の生活領域に含まれていることは想像に難くない⁴⁾。

一方、T2・第5遺構面は⑫層上面に形成されており、時期の特定できる遺物を包含しない⑪層に覆われている。⑪層上にある⑩層がV-1期を上限とする堆積であるから、⑪層については縄文時代後期中葉以降、Ⅳ期に至る時間幅を考える必要がある。しかし、第4遺構面に落とし穴状の土坑があるので、縄文時代の遺構面である蓋然性が高い。なお、T1・第1遺構面は、T2・第5遺構面に対応する可能性もある。

以上、調査地周辺には縄文時代後晩期の遺構面および遺物包含層が存在することが明らかになった。妻木晩田遺跡が縄文時代の狩猟・採集の場であったことは、これまでの調査で、縄文時代の落とし穴とみられる土坑が多数検出されていることからもうかがわれるが、今回の調査では崎ヶ鼻式土器がまとまって出土しており、この段階に小規模な集落が存在する可能性がある。大江山麓地域には住居跡1・2棟で構成される小規模かつ短期的なあり方を示す福田KⅡ式～崎ヶ鼻式段階の集落跡が丘陵や台地に点在しており⁵⁾、妻木晩田遺跡にも、このような集落跡の存在を考慮すべきであろう。

2) V期

T2・第4遺構面で当該期の小ピット群を検出した。当遺構面を覆う⑩層下位の堆積にはV-1期の土器が包含されているから、V-1期を下限とする遺構面と考え

られる。また、T3には、T2・第4遺構面に相当する遺構面を確認できないが、T2・⑩層に対応する④層がT2・⑫層に対応する⑤層上に堆積していることから、⑤層上面にT2・第4遺構面に対比可能な遺構面が存在することが予想される。

なお、T2・⑩層には多くの遺物が含まれており、堆積下位からはV-1期の土器、上半からはV-1～V-3期の土器が出土する。土器は小片が多数を占めており、二次的な堆積と考えられる。第4遺構面にある小ピット群も不規則なあり方をしているので、T2は居住域の中心というよりも、縁辺部に相当すると推測される。なお、T1・第1遺構面はT2・第4遺構面と対応する可能性もある。

3) VI期～古墳時代前期

T2・第3遺構面と第2遺構面で当該期の小ピット群を検出した。第3遺構面を覆う⑨層下位の堆積にはV期～VI期の土器が含まれており、VI期を下限とする遺構面と考えられる。また、⑨層上位には古墳時代前期の土器も混ざるので、第2遺構面は古墳時代前期以降の遺構面であると推測される。なお、⑨層中に含まれる土器は小片が多く、二次的な堆積であると考えられる。また、両遺構面にある小ピット群も不規則なあり方をしており、T2・第4遺構面同様に居住域の縁辺部に相当する可能性が高いように思われる。

4) 古墳時代中期以降

古墳時代中期以降の堆積には、T1・②層、T2・②層～⑧層、T3・②層、T4・②層がある。これらはいずれも近現代の堆積で、古墳時代中期以降、近現代に至る間の明確な堆積は認められない状況にある。また、T2部分には里道が設けられていたようで、T2・第1遺構面では旧里道の路面とみられる硬化面と側溝とみられる溝状遺構を確認した。また、第9次発掘調査では古墳時代中期の土器も出土しており⁹⁾、当然、こうした時期の堆積があつてしかるべきだが、いずれのトレンチにおいてもそれが判然としない。以前、調査地周辺は畑地として利用されており、里道の設置や畑地の開墾に伴う土地の改変により、古墳時代中期以降の堆積が失われている可能性がある。

5) 課題

第1次発掘調査妻木山地区4区の北側に設定したT3

で、平面形が梯子状を呈すVI期頃の遺構を確認した。現状では詳細を知り得ないが、妻木山地区4区から続く弥生時代後期～古墳時代前期に営まれた居住域が、T4も含めた範囲に広がっている蓋然性が高い。また、妻木晩田遺跡では、このような地形にある居住域の様子が判然としないこともあり、平成16年度の重点調査として、T3、T4周辺を調査の対象とする計画である。

また、本調査の基本層序としたT2は、平坦な地形が西へ下がり始める、地形の傾斜変換部分に相当する。ここでは、古墳時代前期以前の堆積が良好な状態で認められた。そこで、縄文時代から古墳時代前期の環境を検討するための材料として、土壌を採集し、花粉および植物珪酸体など微化石分析を実施した。引き続き、平成16年度に計画している重点調査の中でも、古環境復元を視野に入れた自然科学分析を継続し、資料を蓄積する必要がある。平成17年度に刊行を計画している妻木山地区の調査報告では、妻木山地区で行ってきた一連の古環境に関わる自然科学分析成果を総括し、集落をとりまく景観について検討を行いたい。

(濱田竜彦・河合章行・赤井和代)

註

- 1) T1、T2周辺で行ったボーリング調査で、⑬層下約0.4mのところに大山松江軽石層と考えられる火山灰の堆積を確認している。
- 2) 高田健一2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」馬路編「妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002」鳥取県教育委員会
- 3) 河合章行2003「妻木山地区谷部の内容確認調査—妻木晩田遺跡第9次調査—」馬路編「妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002」鳥取県教育委員会
- 4) 岡野雅則編2003「妻木法大神遺跡」鳥取県教育文化財団
- 5) 濱田竜彦2002「山陰の縄文時代後期・晩期の集落—大山山麓を中心に—」『考古学ジャーナル』485、ニューサイエンス社
- 6) 註3)に同じ

表 1 T 1

遺構名	遺構面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
P1	1	24*	-	25	①暗褐色土
P2	1	27	-	37	①暗褐色土
P3	2	19	14	-	①暗褐色土
P4	2	13	9	-	①暗褐色土
P5	2	20	14	-	①暗褐色土
P6	2	18	13	-	①暗褐色土
P7	2	25	25	-	①暗褐色土
P8	2	18*	12	-	①暗褐色土
P9	2	40*	-	-	①暗褐色土
P10	2	32	31	-	①暗褐色土
P11	1	26	-	28	①暗褐色土

表 2 T 2

遺構名	遺構面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
溝	1	-	36-45	36	①灰褐色土 ②褐灰色土 ③灰褐色土 ④灰褐色土
土坑 1	5	-	65	31	①黒褐色土
土坑 2	5	110	-	126	①極暗褐色土 ②黒褐色土 ③黒褐色土
P1	2	39	26	18	①黒褐色土
P2	2	16	15	6	①黒褐色土
P3	2	16	13	8	①黒褐色土
P4	3	43	28	10	①黒褐色土
P5	3	30	26	15	①黒褐色土
P6	3	24	17	5	①黒褐色土
P7	3	36*	29	6	①黒褐色土
P8	3	37	27*	14	①黒褐色土
P9	3	7	6	4	①黒褐色土
P10	3	15	15*	6	①黒褐色土
P11	3	45*	25	9	①黒褐色土
P12	3	19	19	7	①黒褐色土
P13	3	35	28	9	①黒褐色土
P14	3	26	23	36	①黒褐色土
P15	3	32	22	8	①黒褐色土
P16	3	17	17	5	①黒褐色土
P17	3	38*	26*	6	①黒褐色土
P18	3	21*	12*	4	①黒褐色土
P19	3	37	20*	9	①黒褐色土
P20	3	18	15	7	①黒褐色土 ②暗褐色土
P21	4	21	16	20	①暗褐色土
P22	4	24	11	7	①暗褐色土
P23	4	24	18	7	①暗褐色土
P24	4	21	16	9	①暗褐色土
P25	4	19	17	11	①暗褐色土
P26	4	16	12	5	①暗褐色土
P27	4	19	19	9	①暗褐色土
P28	4	24	18	6	①暗褐色土
P29	4	36	27	9	①暗褐色土
P30	4	22	17	15	①暗褐色土
P31	4	65*	50	36	①暗褐色土 ②褐色土
P32	4	19	-	11	①暗褐色土
P33	5	16	13	7	①褐色土
P34	5	15	9	5	①褐色土
P35	5	18	12	11	①褐色土
P36	5	34	-	7	①褐色土
P37	5	29	24	11	①褐色土
P38	5	16	16*	5	①褐色土
P39	5	-	49	18	①褐色土
P40	5	36	32	43	①褐色土
P41	5	14	10	5	①褐色土
P42	5	60	-	3	①褐色土
P43	5	95-	53	7	①褐色土

表 3 T 3

遺構名	遺構面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
棒状遺構	1	420	120	10	①黒褐色土
溝状遺構	1	-	11-3	-	①黒褐色土
P1	1	21	19	-	①褐色土
P2	1	45	20*	-	①暗褐色土
P3	1	20	16	-	①暗褐色土
P4	1	18	16	-	①暗褐色土
P5	1	19	15	-	①暗褐色土
P6	1	24	22	-	①褐色土
P7	1	20	19	-	①暗褐色土
P8	1	20	15	-	①暗褐色土
P9	2	17	15	-	①褐色土
P10	2	20	-	10	①褐色土
P11	2	21	20*	-	①褐色土
P12	2	-	-	-	①褐色土
P13	1	30	25	-	①黒褐色土
P14	1	29	22	-	①黒褐色土
P15	1	37	28	-	①黒褐色土
P16	1	54	47	-	①黒褐色土
P17	2	22	15	-	①暗褐色土
P18	2	-	-	-	①暗褐色土
P19	1	39	-	-	①黒褐色土
P20	1	38	33	-	①黒褐色土
P21	1	25	17	-	①黒褐色土
P22	1	20*	17	-	①黒褐色土
P23	1	30*	28	-	①黒褐色土

表 4 T 4

遺構名	遺構面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
溝状遺構	1	240	58	5	①黒褐色土
P1	1	70	-	2	①黒褐色土
P2	1	53	31	9	①黒褐色土
P3	2	25	-	-	①にぶい黄褐色土
P4	2	14	-	-	①にぶい黄褐色土

*は推定値を表す

表5 弥生土器・土師器観察表

挿図	番号	出土 位層	層位	種類	残存部位	口縁部 脚部等 残存率	法量					胎 土	焼 成	色調 内/外
							器高	口径	頸径	胴部最大径	底径(脚径)			
4	1	T1包含層	2	甕	口縁～頸部	1/16	-	(19.6)	(15.9)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
7	1	T2SD1		低脚杯	脚部	1/6	-	-	-	-	(7.3)	1	2	明黄褐色/明黄褐色
8	1	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/8	-	(16.0)	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/明褐色
8	2	T2包含層	9	甕	口縁部	1/8	-	(14.6)	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
8	3	T2包含層	9	甕	口縁～頸部		-	-	(9.3)	-	-	1	2	橙色/橙色
8	4	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/7	-	(14.8)	(11.6)	-	-	1	2	明黄褐色/明黄褐色
8	5	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/5	-	(11.7)	-	-	-	1	2	黄褐色/黄褐色
8	6	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/10	-	-	-	-	-	1	2	橙色/橙色
8	7	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/12	-	(14.4)	-	-	-	1	2	明黄褐色/明黄褐色
8	8	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/5	-	(17.7)	(16.1)	-	-	1	2	橙色/橙色
8	9	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/12	-	(18.4)	-	-	-	1	2	明黄褐色/明黄褐色
8	10	T2包含層	9	甕	口縁～頸部	1/8	-	(12.3)	(10.3)	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
8	11	T2包含層	9	小壺	口縁～頸部	1/4	-	(10.7)	(9.8)	-	-	1	2	橙色/橙色
8	12	T2包含層	9				-	-	-	-	-	1	2	褐色/樹灰色
8	13	T2包含層	9		胴部		-	-	-	(28.1)	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
8	14	T2包含層	9		底部	1/4	-	-	-	-	(9.4)	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	1	T2包含層	10	器台	受部	1/5	-	(15.0)	-	-	-	3	3	橙色/橙色
9	2	T2包含層	10	甕	口縁～頸部	1/5	-	(19.7)	(14.4)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/浅黄橙、灰色
9	3	T2包含層	10	壺	肩部	1/9	-	-	-	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	4	T2包含層	10	甕	口縁～頸部		-	(22.0)	-	-	-	2	2	にぶい黄褐色/橙色
9	5	T2包含層	10	甕	口縁～頸部	1/5	-	(29.2)	(26.3)	-	-	2	2	浅黄褐色/浅黄褐色
9	6	T2包含層	10	甕	口縁～頸部	1/5	-	(18.4)	(14.0)	-	-	1	2	黄褐色/黄褐色
9	7	T2包含層	10	甕	口縁～頸部	1/10	-	(20.0)	(16.8)	-	-	1	2	橙色/橙色
9	8	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/10	-	(14.2)	(13.4)	-	-	2	2	浅黄褐色/にぶい黄褐色
9	9	T2包含層	10	甕	口縁～頸部	1/6	-	(15.4)	(14.4)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄橙、黄褐色
9	10	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/6	-	(23.2)	(21.9)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	11	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/2	-	(16.0)	(12.3)	-	-	2	2	橙色/橙色
9	12	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/7	-	(14.0)	(12.3)	-	-	2	2	橙色/にぶい黄褐色
9	13	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/10	-	(18.0)	(16.6)	-	-	2	2	灰。にぶい黄褐色 /灰。にぶい黄褐色
9	14	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/10	-	(17.5)	(16.8)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄橙、明赤褐色
9	15	T2包含層	10	甕	口縁～肩部	1/6	-	(11.0)	(10.2)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	16	T2包含層	10		底部	1/2	-	-	-	-	(5.6)	2	2	褐色/黒色
9	17	T2包含層	10	直口壺	口縁～肩部	1/9	-	(12.0)	(13.8)	-	-	2	2	明黄褐色 /明黄褐色、赤色顔料塗布
9	18	T2包含層	10	高坏	坏部	1/9	-	(15.0)	-	(12.3)	-	2	2	にぶい黄褐色/橙色
9	19	T2包含層	10	低脚杯			-	-	-	-	-	2	2	にぶい黄橙、灰黄褐色 /にぶい黄橙、灰黄褐色
9	20	T2包含層	10	器台	筒部		-	-	-	-	-	1	2	黒色/明黄褐色
12	1	T3包含層	2	甕	口縁～頸部	1/6	-	(17.6)	(14.4)	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	2	T3包含層	2	壺	口縁～頸部		-	(13.2)	-	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	3	T3包含層	2	甕	口縁部	1/12	-	(20.8)	-	-	-	2	2	褐色/褐色
12	4	T3包含層	2	壺	口縁～頸部	1/8	-	(16.0)	(14.8)	-	-	1	2	浅黄褐色/褐色
12	5	T3包含層	2	長頸壺	口縁～頸部		-	(14.3)	(11.7)	-	-	3	2	浅黄褐色/浅黄褐色
12	6	T3包含層	2		底部	1/1	-	-	-	-	5.2	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	7	T3包含層	2		底部		-	-	-	-	(8.8)	2	2	灰色/褐色
12	8	T3包含層	2		底部	1/4	-	-	-	-	(6.9)	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	9	T3包含層	2		底部		-	-	-	-	-	1	2	浅黄褐色/浅黄色
12	13	T3包含層	3	甕	口縁～肩部	1/5	-	(15.0)	(11.4)	-	-	1	2	明黄褐色/明黄褐色
12	14	T3包含層	3	甕	口縁～頸部	1/10	-	(14.3)	(10.5)	-	-	1	2	褐色/褐色
12	15	T3包含層	3	小壺	口縁～頸部	1/8	-	(12.0)	(10.6)	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	18	T3包含層	4	甕	口縁～頸部	1/8	-	(19.4)	(15.8)	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	19	T3包含層	4	甕	口縁～頸部	1/7	-	(15.4)	(13.1)	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	20	T3包含層	4	甕	口縁～肩部	1/12	-	(15.0)	(13.4)	-	-	1	2	にぶい黄褐色/灰黄褐色
12	21	T3包含層	4	甕	口縁部	1/8	-	(20.6)	(16.8)	-	-	3	3	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	22	T3包含層	4	壺	頸部～肩部		-	-	-	(18.3)	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	23	T3包含層	4	直口壺	口縁部	1/8	-	(8.3)	(7.0)	-	-	2	2	褐色/褐色
12	24	T3包含層	4		底部	1/5	-	-	-	-	(6.0)	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	25	T3包含層	4		底部	1/5	-	-	-	-	(5.8)	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色

- 挿図、番号は本文中の挿図番号に対応する。
- 出土位置はトレンチおよび遺構名を示す。
- 口縁部脚部等残存率は口縁部を優先値とした。
- 法量について、反転復元による推定値は()で示した。
- 胎土、焼成については以下のよう記号を用いる。
胎土 密-1 やや粗-2 粗-3 焼成 硬質-1 良好-2 軟質-3
- 色調は「新版 標準土色帖」による。

表6 縄文土器観察表

挿図	番号	出土位置	層位	種類	残存部位	口縁部脚部等残存率	法量					胎土	焼成	色調 内/外
							器高	口径	頭径	胴部最大径	底径(脚径)			
4	3	T1包含層	4	鉢	口縁部	1/20	-	(14.4)	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
4	4	T1包含層	4	深鉢	肩~胴部	-	-	-	-	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	21	T2包含層	10	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	1	2	橙色/橙色
9	22	T2包含層	10	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	23	T2包含層	12	深鉢	口縁部	1/12	-	-	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
9	24	T2排土中	-	短頸壺	肩部	-	-	-	-	-	-	1	2	明赤褐色/明赤褐色
12	10	T3包含層	2	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	1	2	黒褐色/黒褐色
12	16	T3包含層	3	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	1	2	明黄褐色/明黄褐色
12	17	T3包含層	3	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	1	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色
12	26	T3包含層	4	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	2	2	灰色/暗灰黄色
12	27	T3包含層	4	深鉢	口縁部	-	-	-	-	-	-	2	2	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色

1. 挿図、番号は本文中の挿図番号に対応する。
2. 出土位置はトレンチおよび遺構名を示す。
3. 口縁部脚部等残存率は口縁部を優先した。
4. 法量について、反転復元による推定値は()で示した。
5. 胎土、焼成については以下のような記号を用いる。
胎土 密-1 やや粗-2 粗-3 焼成 硬質-1 良好-2 軟質-3
6. 色調は「新版 標準土色帖」による。

表7 土製品

挿図	番号	出土位置	層位	器種	法量				胎土	焼成	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
4	2	T1包含層	2	土錘	4.6	1.6	1.5	8.5	1	1	
7	2	T2溝	上層	土錘	4.1	1.1	1.3	5.3	1	2	
12	11	T3包含層	2	不明	-	-	1.3	5.6	1	1	
12	12	T3包含層	2	土錘	4.1	1.2	1.2	13.0*	1	2	

1. 挿図、番号は本文中の挿図番号に対応する。
2. 出土位置はトレンチおよび遺構名を示す。
3. 口縁部脚部等残存率は口縁部を優先した。
4. 法量について、残存値には*を付した。
5. 胎土、焼成については以下のような記号を用いる。
胎土 密-1 やや粗-2 粗-3 焼成 硬質-1 良好-2 軟質-3

表8 石器

挿図	番号	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
15	1	T1包含層	2	石鏃	黒曜石	2.6*	1.8	0.4	1.4*	
15	2	T2包含層	4	石鏃	黒曜石	1.1	0.9	0.3	0.2	
15	3	T2包含層	7	石鏃	安山岩	2.6	1.7	0.4	1.3	
15	4	T2包含層	7	石鏃	黒曜石	2.2*	1.4*	0.4	0.7*	
15	5	T2包含層	10	石鏃	黒曜石	2.4*	1.7	0.4	1.1*	
15	6	T2包含層	10	石鏃	黒曜石	3.4	2.3	0.5	1.6	
15	7	T2包含層	10	削器	黒曜石	10.8*	5.7*	1.5	76.1*	打製石包丁の可能性あり
15	8	T2包含層	10	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.3	
15	9	T3包含層	1	石鏃	黒曜石	2.0	1.9*	0.4	0.9*	
15	10	T3包含層	2	磨石	デイサイト	12.1	8.6	3.1	468.6	端部に敲打痕あり
15	11	T3包含層	2	磨石	デイサイト	7.1	5.4	2.5	130.6	
15	12	T3包含層	3	磨石	デイサイト	11.4	7.7	5.2	519.6	

1. 挿図、番号は本文中の挿図番号に対応する。
2. 出土位置はトレンチおよび遺構名を示す。
3. 法量について、残存値には*を付した。

表9 鉄製品

挿図	番号	出土位置	層位	器種	法量			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
16	1	T2包含層	10	板状鉄製品	10	2.4	0.5	鉄斧の可能性あり
16	2	T3梯子状遺構	埋土	へら状鉄製品	1.8*	0.8	0.3	木質が付着している

1. 挿図、番号は本文中の挿図番号に対応する。
2. 出土位置はトレンチおよび遺構名を示す。
3. 法量について、残存値には*を付した。